

中長期目標 (学校ビジョン)	安心、つながり、感動にあふれる学校 ～協働と共感の教育～		今年度の 重点目標	1. 信頼と安心につつまれた学級・学部・学校づくり 2. 「本校で学んでよかった」の教育実践と支援の充実・社会参加 3. 病弱・肢体不自由教育実践校としての役割発揮と存在発揮 4. 教師の専門性の向上と授業改革			
		年 度	当 初	評 価 結 果			
評価項目	評価の具体項目	現 状	目標(年度末の目指す姿)	目標達成のための方策	経過・達成状況	評価	
信頼と安心につつまれた学級・学部・学校づくり	(各学部) 個々の児童生徒についての共通理解を進め、実態に応じた指導・支援の充実に努める。	児童生徒一人一人の特性、支援方法等について、教職員間の共通理解がまだ不十分である。	教職員が個のねらいにそった適切な指導・支援を行っている。	・児童生徒一人一人の目標・支援方法のわかる資料を作成する。 ・目標検討会や学部会等で定期的に実態・支援方法について確認する。	・学部会や目標検討会、PCの掲示板等を活用して、共通理解を図ろう努めているが、話し合いの時間の確保が難しく、学部全体の児童生徒の支援方法の共通理解が十分とは言えない。	C	
	(各学部) 児童生徒の発達や心身の状態を的確に把握し、安心して学べる学級づくりをする。	児童生徒の病気や発達・心身の状態を的確に理解した支援の必要性を感じている。	児童生徒が教職員と心を通わせ、安心して学習に取り組んでいる。	・児童生徒の発達や心身の状態を客観的な指標や関係機関からの情報を活用しながら正確に理解する。 ・児童生徒からのサインや発信の意味・その背景をしっかりと受け止める。	・児童生徒の表出や保護者の気持ちを受け止めることに努めているが、学校生活(集団での生活)に不安のある児童生徒、保護者がある。	B	
	(保健安全部) 緊急時を想定した訓練に取り組み、安全で安心な教育環境を整えるとともに、素早く、正確な対応ができる。	避難訓練、救急訓練、救急ウィークで想定した場所については、素早く、正確な対処ができてくつがあるが、校舎内すべての場所の緊急対応にいたっていない。	あらゆる緊急時を想定し、素早く、正確に協力体制を対応できる教職員集団になっている。	・臨機応変に動ける教職員集団になるため、訓練時も一人一人が考えて動ける内容を設定する。	・救急訓練を重ねるごとに知識や技能が身に付いてきている。臨機応変に一人一人が動くことができるよう研修を積む必要がある。	C	
「本校で学んでよかった」の教育実践と支援の充実・社会参加	(小学部) 児童の卒業後の姿をもとに小学部でつきたい力を明確にし、豊かな生活づくりを進める。	高等部卒業後の将来の具体的な姿をイメージできていない。	社会参加のために、現段階で必要な力を明確にし、学習内容について説明できる。	・卒業生の情報や福祉サービスの状況等について関心をもって収集する。 ・現段階で必要な力について情報交換を行い、指導・支援について保護者の理解・協力をえる。	・卒業後の子ども一人一人の姿を教師がよりイメージすること、見学をして知る必要がある。	D	
	(中学部) 生徒の卒業後の姿をもとに中学部でつきたい力を明確にし、必要な学習を進める。	卒業後の具体的な姿やそのために、どんな学習が必要かが明確でない面がある。	生徒一人一人の将来の具体的な姿についてイメージを共有し、そのための課題を明確にして授業を行う。	・個人懇談等で卒業生の情報や福祉サービスの状況等、保護者へ情報提供し、生徒の将来について話し合う。 ・目標検討会や施設利用体験・職場体験学習の反省会等で、生徒の将来について具体的に話し合い、課題を明確にする。	・研修や資料等により得た情報を保護者へ積極的に提供するようにしているが、共有までには至っていない。 ・保護者との懇談、研修、学部での話し合い等での情報を、施設利用体験や職場見学・職場体験先の選定や学習に活かすようにしている。	B	
	(高等部) 生徒の卒業後の姿をもとに高等部でつきたい力を明確にし、必要な学習を保障する。	今の学習と、生徒の将来の生活とのつながりが不十分で、学習内容の精選が的確でない面がある。	生徒一人一人の将来の具体的な姿についてイメージを共有し、実態に即してわかりやすく授業する。	・目標検討会や職場体験学習の反省会等で、生徒の将来について具体的に話し合う。 ・生徒に十分な情報を提供し、自分の総合的なライフプランが考えられるようにする。	・進路に関する共通理解の会で、3年生については具体的な将来の姿について話し合い、共通理解できた。 ・生徒一人一人が自分の将来について具体的に考えられるまでに至っていない。	D	
	(人権・地域支援部) 家庭と学校・関係機関が連携し、児童生徒がよりよく生きるための支援をめざす。	昨年度、個別の支援会議の実施が増えてはきたが、まだ全教職員・保護者に浸透していない。	保護者・学校・関係機関の支援がつながり、協働しながら、児童生徒の社会生活を支援している。	・個別の支援会議の実施等、連携する機会を設けるよう働きかける。 ・キャリア教育を推進する中で、社会生活を豊かにできるような働きかけをする。	・支援会議等、連携する機会が増えてきてはいるが、まだ支援会議がどのようなものを把握できていない保護者あるいは教員がいる。 ・現在の状況に満足していて、課題意識を持てず、支援会議につながりにくい。	C	
	(各学部) 学習や行事のねらいや児童生徒の様子や成長がわかるように、学級だより、学部だよりの内容を充実させる。	学級だよりや学部だよりを出しているが、学習や行事のねらいや児童生徒の成長を十分に伝えているとはいえない。	学習や行事のねらいや児童生徒の成長がわかり、保護者からの理解や信頼が深まる。	・学級だよりや学部だよりには必ず学習や行事のねらいを示し、児童生徒の様子を知らせる。	・学級だより・学部だより等で、学習や行事のねらいを伝えることが多くなってきているが、十分とは言えない。	C	
病弱・肢体不自由教育実践校としての役割発揮と存在発揮	(研究研修部) 他校や療育園等の外部機関と連携し、本校の病弱・肢体不自由教育の専門性を高める。	他校や療育園等と連携し、研修会や勉強会を開催し、教職員の意識は向上しているが、教職員全体の専門性をより高める必要がある。	研修会や勉強会、他校や外部機関等から得た情報を実践に活かす教職員が増えている。	・定期的な勉強会や研修会、研修報告会を開催したり、本校や他校の教職員向け通信による情報発信を行ったり、専門性の向上に活かす。	・勉強会や研修会等を定期的に開催したり、通信や書籍による情報発信を積極的に行ったりすることで、専門性を高め、実践に活かしている職員も増えてきている。 ・職員がお互いに助言し合うまでに至っていない。	D	
	(各学部) 授業の公開に努め、お互いに助言し合って授業の改善を図る。	授業を直接見あうことに難しさがあ、工夫が必要である。	自己研修の成果を生かした授業改革について定期的に話し合い、授業公開や研究会を計画的に実施する。	・単一障がい学級、重複障がい学級それぞれで公開の方法を決め、お互いにアドバイスし合う。 ・他校や他県の授業を参観したり、情報交換したりして、授業づくりの視点を広げる。	・自分が担当する児童生徒に応じた授業づくりに努めたが、他学級・他学部の授業を参観し、意見交換を行うことは不十分であった。	E	
教師の専門性の向上と授業改革	(研究研修部) 各学部ごとに授業改善のポイントを明確になってきているが、小中高の連携による授業改革までには至っていない。	各学部ごとに授業改善のポイントが明確になってきているが、小中高の連携による授業改革までには至っていない。	小中高で連携しながら、SPDCAサイクルによる授業改革を行っている。	・各学部の授業改善ポイントを共有し、小中高で連携した授業研究会を開催し、学校全体で授業改善に取り組みながら、授業改革を進める。	・小中高が連携しながら、合同で授業改善を進めている部門もあり、共通した授業改善ポイントを整理し、授業改善に取り組んでいるところである。	D	